和陶飲酒　并敍

吾飲酒至少、常以把盞爲樂、往往頹然坐睡、人見其醉、而吾中了然、蓋莫能名其爲醉爲醒也、在揚州飲酒、過午輒罷、客去解衣槃礴終日、歡不足而適有餘、因和淵明飲酒二十首、庶以彷彿其不可名者、示舍弟子由晁無咎學士

陶の「飲酒」に和す　并びに叙

吾れ酒を飲むこと至って少なけれども、常に盞を把るを以って楽みと為せり。往往にして頽然として坐睡す。人其の醉を見る。而も吾が（こころの）中は了然たり。蓋し、能く其の醉たるか醒たるかを名づくる莫き也。揚州に在りて酒を飲むに、午を過ぐれば輒ち罷む。客去って衣を解き槃礴すること終日なり。歡は足らざれども而も適は余有り。因て淵明の「飲酒」二十首に和す。庶ねがわくは以って其の名づく可らざる者を彷彿たらしめんか。舍弟子由と晁無咎学士に示す。

【語釈】

○元祐七年（一〇九二）揚州在任中の作。○和陶飲酒　陶淵明の「飲酒」と題する二十首の詩の一首ごとに、その韻脚の字をそっくり使って作った詩。すなわち次韻。古人の詩に次韻することは恐らく蘇軾をもって始めとする。宋版の「施註蘇詩」では、和陶詩（「追和陶淵明詩」五十四首）だけを別に集めて二巻とする。そのはじめに弟蘇轍の「引」（序）をのせ、紹聖四年（一〇九七）の日付がある。しかし作詩の年代で言うと、この「飲酒」に和したものが最も早い（陶淵明の原作は、一集、一海知義注「陶淵明」三六ページ以下に見える）。○把盞　盞はさかずき。さかずきを手にとる。○頽然　ぐったりくずおれるさま。○坐睡　いねむり。○吾中　この中は心中の義。○了然　はっきりしているさま。○莫能名　名は動詞、名づけるとは言語によって示すこと。莫能は……する方法が全然ない意。○過午　午は正午、午前十二時。○輒罷　輒はいつでも。罷は中止。○解衣槃礴　上衣の帯を解いて、足を投げ出してすわる。槃は般とも書く。この四字は「荘子」田子方篇のことば。○歡不足　歡は上機嫌、有頂天になること。○適有余　適は心の爽快さ、快適。○因　そういうわけで。○庶以　庶はやや謙遜の意を含んだ希望のことば。以はこの詩によって。○彷彿　おぼろげにあらわす。○舍弟子由　子由は蘇轍のあざな。○晁無咎学士　無咎は晁補之のあざな（二四ページ参照）。無は无に同じ。補之はこのとき校書郎（宮中の図書の校正をするのが本来の職務）の資格で、揚州の通判（副知事）であった。学士は校書郎の俗称で、翰林学士のことではない。○蘇轍および晁補之は、蘇軾の詩にさらに次韻した二十首をそれぞれ作ったのが伝わっている。

【解釈】

私は酒量はごく少ないが、ひごろ杯を手にすることを楽しみにしている。そしてつい体をくずし、居ねむりしてしまう。みんなは私が酔いつぶれたと思いこむ。だが、私の頭はさえている。酔ったのか、醒めているのか、どうも確かには言えないのである。揚州においても、酒を飲んで正午をすぎるとやめにする。客が帰ったあと、着物の帯をくつろげ、それから一日じゅう足を投げ出してすごすのである。酔いごこちは充分とはいえないのだろうが、心ののびやかさは余りすぎるほどである。それで、淵明の「飲酒」の詩二十首に韻をあわせて作る。この名状しがたい境地を、おぼろげにでも表現したいと思うまでである。弟の子由と晁無咎学士とに、これを示す。

中国詩人選集第二集　蘇軾　小川環樹　より抄出

和陶飲酒　其一

我不如陶生
世事纏綿之
云何得一適
亦有如生時
寸田無荆棘
佳處正在茲
縱心與事往
所遇無復疑
偶得酒中趣
空杯亦常持

我は陶生に如かず
世事　之を纏綿す
云何にして　一適を得ること
亦た　生の時の如き有らん
寸田に　荆棘　無し
佳処　正に茲に在り
心を縱って　事とともに往かしむ
遇う所　復た疑うこと無けん
偶ま　酒中の趣を得たり
空杯　亦た常に持す

【語釈】

○我不一句　宋本では「我生不如陶」となっている。第四句の「如生時」の生は陶淵明をさすに違いないから、ここも陶生とする方がよいであろう。陶生は陶先生というのと同じで、この生は敬称であり、古い用法。○纏綿之　纏綿はまつわりついて離れないこと。之は上句の我をうける。○云何　如何と同義。どうすれば。○得一適　一は一回の。ここでは一回でもよいからの意がある。○亦　（陶淵明だけでなく）私にも。○有如生時　陶先生の（心境）と同じものが得られる時があるだろうか。○寸田　一寸四方のはたけ。いわゆる丹田。人の精気のやどるところ。道教の書「黄庭経」に見える。眉間と心（心臓）と臍の下と三処あるともいう。○荆棘　いばら。心をわずらわすもののたとえ。○佳処　すばらしい点。○縱心一句　自分の心を自由にして、事物といっしょにすきなところへ行くようにさせる。○所遇　この場合の所は一切の意。出あうものには何でも。

【解釈】

陶淵明先生には、私はとても及ばない。俗事がしつこくまといつくからだ。一体どうしたら、心ののびやかさが得られ、先生のような心境になる時があるのだろう。心の一寸四方の田、そこからいばらが消えうせるとき、すばらしいのは、正にそのときだ。心が事のゆくままに、どこへでも行きたいようにさせよう。どんな事に出あおうとも、私はためらわず受け入れよう。酒の中で楽しさに出あえるのは、まったく偶然にしかないが、からっぽのさかずきは、しょっちゅう手にもっている。

中国詩人選集第二集　蘇軾　小川環樹　より抄出

和陶飲酒二十首 其十一　（一〇九二年七月）

民勞吏無德　民の 労るるは 吏に徳無く
歲美天有道　歲 美にして 天に道あり
暑雨避麥秋　暑雨 麦秋を避け
溫風送蠶老　温風 蚕の老を送る
三咽初有聞　三咽 初めて聞く有り
一溉未濡槁　一溉 未だ槁 を濡さず
詔書寬積缺　詔書 積欠を寛くして
父老顏色好　父老 顔色 好し
再拜賀吾君　再拝 吾が君を賀す
獲此不貪寶　此の 貪らざるの宝を獲たり
頽然笑阮籍　頽然として 阮籍を笑い
醉几書謝表　醉几 謝表を書す

【語釈】○送蠶老…蚕が成熟して繭をつくる。○三咽…三（しばしば）声を詰まらせる。○寬積欠…租税滞納の催促を寛大にする。元祐七年五月・六月と打続いて、東坡はそのことを願いで、勅許に成った。○不貪寶…春秋左氏傳に「宋のある人、玉を得、これを子罕に献ず、受けずして曰く、われは貪らざるを以て宝となす」とある。頽然…酔ってたおれるさま。○阮籍青眼…三国魏の人。好ましい人には青眼を以て対し、礼俗の士を観れば白眼を以て対したという。

【解釈】民は疲れて 吏に徳なきを知るべく、歲の豊かなるは、天に道あるが為である。夏の雨は麦秋を避けて降るべく、暖かい風は、早く蚕のあがるようにする為である。われ、揚州に来たりし後、兎角、災害が打ち続いて、その実況は聞くに堪えず、この頃雨が降ったというが、ほんの少しばかりで、まだ枯槁せるものを濡すにおよばぬ。天子は詔を下して、租税滞納の督促を寛大にせよと仰せられ、父老初めて顔色も直り、再拝して、予に賀意を表し、貴下は貪らざるを宝とするお方で、これを上にに戴くことは、まことに有難い仕合せであるといった。予はやがて頽然として酒に酔い、ことさらに曠達を成して礼法を蔑視した阮籍の狂愚を笑いながら、取り合えず、天子への謝表を起草した。

国会図書館デジタル資料 国訳漢文大系より抄出

和陶飲酒　其十二

我夢入小學
自謂總角時
不記有白髮
猶誦論語辭
人間本兒戲
顛倒略似茲
惟有醉時眞
空洞了無疑
墜車終無傷
莊叟不吾欺
呼兒具紙筆
醉語輒錄之

我　夢に小学に入る
自から　総角の時なりと謂えり
白髪有るを記せずして
猶お　論語の辞を誦せり
人間　本と児戯なり
顛倒せること　略ぼ茲に似たり
惟だ　酔時の真なる有りて
空洞にして　了て疑い無し
「車より墜つるも　終に傷る無し」と
荘叟　吾を欺かず
児を呼んで　紙筆を具え
酔語　輒ち之を録せしむ

【語釈】

○小学　子どもの学校、塾。蘇軾は八歳から塾にかよったが、その先生は張易簡という道士であった。○自謂　（夢の中で）自分のことを……と思っていた。○総角　みずら、あげまき。十五歳以下の児童の髪のゆいかた。○不記　（夢の中では）次のことを記憶していなかった。○論語辞　児童が始めて学ぶ古典は唐代以来、「孝経」と「論語」であった。○人間　人の世。○児戯　子どものあそび。この句は、人の一生の行動が大きい目から見れば子どもの遊びのようにかりそめのものだと言うのであるが、もっと大きい立場からすると、この世界全体を動かす力（造物）のはたらき自体が児戯と同じく無目的である、少なくともその真の意味は人にはわからない、との思想を背後に有する（上巻　解説　一五ページ参照）。○顛倒　本と末とがひっくりかえってさかさまなこと。秩序の混乱、不自然、不合理を意味する。○略似茲　略はいささか、おおかた。茲は此と同義で、上句の児戯をうける。○酔時真　酒に酔って世間の束縛を全く離れた時に、にんげんの真の本性があらわれるという考え。○空洞　うつろなこと。おおいかくすものがないこと。○了無疑　了はふつう「ついに」とよむが、全然、まるきりの義。○墜車一句　「荘子」の「酔っぱらった男は車から落ちても死なないのは、その神（精神）が完全だからだ」（達生篇）のことば。○荘叟　「荘子」の著者荘周のこと。叟はおきな。敬称。○不吾欺　私をだまさなかったとはそのことばにまちがいはないと私は信ずる意。○呼児　児は通常男子、むすこをいう。○輒録之　輒は、そのたびに、いつもの義。録は書き取る。之は酔語をうける。

【解釈】

夢の中で、私は寺小屋にかよっていた。じぶんでも、髪をあげまきにしていた幼いころのつもりだった。しらがの事は、まるで思い出しもしなかった。まだ論語の文句を暗誦させられていた。人の世は、もともと、子どもの遊びなのだ。その不合理さは、だいたい、こんなものなんだ。酔うた時こそが、ほんとうのすがたであって、さえぎるものは何一つなく、何のうたがいもない。「酔っぱらいは車から落ちても、けがさえしない」と、荘子の翁が言ったのも、たしかにうそじゃなかった。息子をよんで、紙と筆とを持ってこさせ、酒の上のたわことを、ひとつひとつ、書きとめさせておく。

中国詩人選集第二集　蘇軾　小川環樹　より抄出

和陶飲酒　其十五

去郷　三十年
風雨　荒舊宅
惟存　一束書
寄食　無定迹
毎用　愧淵明
尚取　禾三百
頎然　六男子
粗可　傳清白
於吾　豈不多
何事　復歎息

郷を去ること　三十年
風雨に　舊宅は荒れん
惟だ　一束の書を存し
寄食　定迹無し
毎に用って　淵明に愧づ
尚ほ取る　禾三百
頎然たる　六男子
粗ぼ　清白を傳ふ可し
吾に於て　豈に多からざらむや
何事ぞ　復た歎息する

【語釈】

・三十年　進士及第後、母の喪があけて、から、父に侍して都へのぼったのが嘉祐四年（一〇五九）なので、この年で三十三年となる。その間、父の喪で帰郷（一〇六七年四月）しているが、喪があけ都へむかって旅立って（一〇六八年十二月）以後、ついに生涯、帰郷の機会はなくて終わる。

・一束書　韓愈の児に示すの詩（集巻七）に「始め我京師に来りしとき、止だ一束の書を攜ふるのみ」

・寄食　人にたよって糊口する。ここは官吏としての生活をいっている。

・禾三百　俸禄をいう。詩経の魏風の伐檀の篇に「稼ぬず穡めずして、胡ぞ禾三百廛を取る兮」（自分で働きもしないで、農家三百軒分もの収穫をうけとるのか）

・頎然　せが高くりっぱなさま。詩経の衛風の碩人の篇に「碩人其れ頎いなり」

・六男子　東坡の子の過・迨・過、弟の子由（轍）の子の遲・适・遹。中国では排行を通して兄弟の順序をかぞえる。

・清白　清廉潔白。官吏としての生活についていう。漢書の楊震伝に「後世をして称して清白吏の子孫と為さしめん」

・何事　どうしたことか。

・嘆息　陶淵明の原詩の末句は「素抱深可惜」なので、「惜」の字を押むべきもの。東坡の誤りか。

【解釈】

故郷を去ってもう三十年、古びたわが家は風雨にすっかり荒れはててしまっていることであろう。身辺にはただ一束の書物を残し、寄食してまわって、おちつき場所もないわたくし、つねづね淵明に対して恥ずかしく思うのは、それでいてなお少なからぬ俸禄を食むことである。

でも、身のたけもりっぱに成長した六人の男の子がいるので、清廉な官吏に終わったわが名を、どうやら後世に伝えてもらえよう。自分にとって、六人ではまだ足りないとでもいうのか、またも嘆息をもらすのはどうしたことか。

漢詩大系　蘇東坡　近藤光男より抄出